

fate/brave gunfighter

ひもきゅうり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アメリカ西部開拓時代、ある伝説があつた。

たまたま見たドラえもんのアニメを見て思いついたネタ、どつかで同じような話が転がつてかもしれない。

設定ガバとキャラ崩壊に注意

目

次

一章
·
四節

一章
·
三節

一章
·
二節

一章
·
一節

F ·
一節

22 18 12 8 1

F・一節

アメリカ西部開拓時代、ある伝説があつた。

曰く、不殺のガンマン。

曰く、秩序の流れ者。

曰く、臆病な勇者。

曰く、もう一人のキッド。

曰く、幼き正義の味方。

彼のふたつ名はいくつもある。しかし在り得ないほどの彼の伝説から後世の研究家は彼の存在を否定した、彼はビリーザキッドの活躍に刺激された誰かの創作であると結論付けられた。彼の足跡の少なさもその結論をより現実的な物としていた。彼が登場するのはたつた一度のみ、とある町になんの前ぶりもなく現れ、そして消えるよう去つていた、その後彼の姿を見た者はいなかつた。その町以外に、彼の存在を示す証拠はどこにも無かつた。故に彼の実在は曖昧な物となつてゐる。

しかし、彼の存在を肯定する人たちも確かに存在する。彼らは親から子へと脈々とその伝説を語り継いでいた。伝説には幾つかのパターンがあるが、どのパターンでも必ず最後はこう締めくくられる。

『困つた時や迷つた時、自分ではどうしようもないと思つた時は必ず誰か助けてくれる人が現れる。けれど勘違いしてはいけない、その誰かは目の前に立ち塞がる障害物を除いてくれるだけ、その後は必ず自分の足で歩いて行かなければいけない』

伝説が語られる家庭では、子供がある程度大きくなるとカウボーイハットと玩具の拳銃、そして丸い顔をした狸をデフォルメしたような人形を子供に与える。臆病でもいい、決して力強く無くてもいい、ただ勇気を持つて優しく、人を思いやれる人間に育つてほしいという願いが込められる。

やがて時を経て伝説は海を渡つた。そしてある日、アメリカから太平洋を超えた先にある島国において、ある少女に伝説がまた語り継が

れ、贈り物が贈られた。少女はまだ幼く、伝説の意味を理解できていなかつたが、なんとなくかつこいと感じて贈り物を大切な物とした。

それからいくらかの年月が流れた。成長した少女は抗えない絶望を感じた。諦めず、目を逸らさず、手を伸ばしても、それでも間に合わない、もう自分ではどうしようもない。

願った。

少女は願った。誰か助けて欲しいと、お守り代わりのカウボーアハツトを片手で強く握りしめ、ただ強く純粹に願つた。

そして願いは届いた。本来、カウボーイハット触媒だけでは足りない、適切な陣と魔力が必要となる儀式だつたが、幸運な事に陣の代用となる盾と、魔力の注がれた杯が近くに存在していた。少女の願いが、彼女の意思が、三つを繋げ、むりやり儀式を成功させた。

「とりよせバッグ！」

手が届いた。少女の手ではない。彼女のものよりももつと幼く小さな手だつたが、空間を超えて確かに届いた。手は掴んだ者を離さないように強くひつぱり、自分のもとへととりよせた。

その空間にいた者達は皆が手の主に注目した。手の主は幼い少年だつた。親しみやすそうな丸っこい顔に真ん丸なメガネを掛け、黄色いシャツと短いズボンを身に纏い、腰には二挺の拳銃を、そして頭には少女の持っていた物とそつくりなカウボーイハットを被つていた。少年は自分に視線が集まっていることに気が付くと少し恥ずかしそうしながらも、しつかりと少女に向き合つた。

「えっと、さーばんと？ だつたつけ？ まあいいや、さーばんと、アーチャーです。しょーかんに応えてきました。お姉さんが僕のマスターですか？」

誰もが、呆気に取られた。その中で最も早く我を取り戻したのは、少女だつた。

「うん！ 私が願つたの、私は藤丸立香！ あなたのマスターだと思います！」

「分かつたよ。とりあえずむつかしい事はよく分からなければ、こ

れでよかつたんだよね？」

少女の願いが正しき物であつたかどうか、それを判断出来る者はいない。ただ彼女の願いは確かに運命を超えた。

「馬鹿な！ サーヴァントだと!? まさか聖杯が反応したのか!?

次に我に帰つたのはシルクハットを被つた男だつた。彼は手に持つ杯と少年を驚愕の表情で見比べる。

「クソッ！ 実にふざけたことだが、まあいい。どのみちオルガの肉体は既に壊れている、サーヴァント一体でどうにか出来る問題でもない。消え去るのがほんの少し遅れるだけだ」

「レフ……」

「ああオルガ、君の燃え尽きる姿を見れないのは実に残念だけれど、そろそろこの特異点も限界のようだ。48人目の適正者とカルデアの諸君、既に人理の焼却は成った。無事なのは磁場に守られたカルデアぐらいのものだろう。だがそれも2016年を迎えるまでの短く虚しい抵抗だ。この結末は変えられない、精々残つた時間で祈りでも捧げるといい。では私は他にも仕事があるのでこれで失礼するとしてよう」

男はそう言い切ると、すぐに姿を消した。

「レフ……どうして……、私は……私は……」

「所長しつかりして！」

少年が手にとつた者は茫然と、焦点の合わない視線を男が消え去つた場所に向けていた。それを見た少女、藤丸立香が励ますが、返事はない。

『まずいぞ、特異点の崩壊が始まつた！ 皆、今急いでレイシフトを実行している！ もう少し待つてくれ！』

「ドクター！ でも所長は！」

『分かつて！ でもどうしようもないんだ！ 肉体が既に死んでいる限り、所長はレイシフトに成功してもすぐに消え去ってしまう！』

「そんな……」

そんな会話がなされている横で、少年は頭を捻つていた。大きな盾

を持った少女と半透明の男が会話しているが、少年はいきなり呼ばれた上に状況もさっぱり分からない、そこで少年は自分を呼んだマスターに問い合わせた。

「ねえ、どういうことなのか僕にも説明してよ」

「えっと、私も詳しい仕組みとかは分からんだけど、所長はもう死んでるから帰れないみたい……」

「えつ、もう死んでるって事は……、ギヤーお化けー！」

『随分と失礼なサーヴァントだな！ それより君は誰、いやそんなことは今はどうでもいい。君はなんとか出来ないのかい!?』

「う、ごめんなさい。えつともし肉体が無事だつたら所長さんはなんとかなるの？」

『なんとかなる、かもしね。正直に言つて、肉体から魂だけが抜けた状態で、肉体が滅ぶなんて特異な状況は僕も遭遇したことがないんだ。でももし、なんとかなるなら最善は尽くすべきだ、お願ひだ名も知らぬ英靈よ、どうか所長を救つてくれ！』

「……分かつた、取り合えずやれるだけやつてみます！」

『ありがとう！』

少年はおもむろにポケットに手を入れると、明らかにポケットに入るサイズではない道具を二つ取り出した。

「カチンカチンライトとテキオーラ！」

少年は懐中電灯のようなその二つの道具から出る光を所長と呼ばれる人物に当てるた。

『よしなんとかレイシフトは間に合いそうだ！ 立香君、マシユ、念のためにしつかり所長を捕まえておいてくれ！』

その声とともに所長を中心として、少年達は光の粒子となり、特異点から脱出した。彼らの姿が消えてすぐに彼らのいた空間は瓦礫に押しつぶされた。

少女は暫く意識を失っていたが、彼女を呼ぶ声に目が覚ました。

「立香君、やつた成功したぞ！」

「……ドクター？ ここは……つそだ所長は!? ドクター所長とマシユはどうなつたの!?」

「安心してくれ、マシユは無事だ。ただ所長に関しては僕もうまく説明出来ない、一応、所長らしき者は君たちと一緒に帰つてきているけど、意識がないうえにまるで鉄の塊みたいにカチンカチンになつているんだ。たぶん君が呼んだサーヴァントが最後に何かしていたみたいだからそのせいだと思う」

「じゃあそのサーヴァントは?」

「君の隣で気を失つてゐるよ、ひとまず彼を起こして所長の状態を説明してもらおう」

そう少女が説明を受けてゐる隣で、少年は起こされるまもなく目を覚ました。

「やあ目が覚めたみたいだね」

「ここは……?」

「……」はカルデアだよ、まあ詳しい説明はまた後でしよう。今はひとまず所長を優先したい

「あつそりだよ! 所長さんの体はどこですか!?

「残念だけど肉体はほとんど残つていなかつたんだ、なんとか所長の物と思われる肉片は確保してあるけれど……」

「じゃあそれを急いで持つてきてください! カチンカチンライトは5分しか効果がないんですよ!」

「5分? いや今はいいや、所長の肉片はもうここに持つてきているよ」

そういつて、ドクターと呼ばれた男はバケツに入った血肉の集まりを少年に差し出した。

「うつ……」

その生々しい物体に少年は思わず吐き気を催した上に気が飛んでしまいそうになつたが、なんとか堪えると、ポケットから一つの道具を取り出した。

「タイム風呂敷!」

少年が取り出した布切れをバケツに被せると、風呂敷の中で何かが膨らむように蠢いた。

「なんだこれ、いつたい何が起こっているんだ!?」

ドクターが不思議な物を見るような目でその様子を見ていると、いつの間にか風呂敷の中の動きは収まつた。それを確認した少年が風呂敷をどけると、そこには血肉ではなく、一人の人間の肉体が存在していた。

「これは!? 間違いなく所長だ! こんなのはもうほとんど魔法の域だぞ!」

「えつとドクターさん? 所長さんはどこですか?」

「あ、ああうん、君たちと一緒に帰ってきた所長なら君の後ろにいるよ」

少年が後ろを振り返るとそこには確かに所長がいた。ただ帰還する前と変わらず虚ろな視線はどこも捉えていなかつた。

「よし、 ireかえロープ!」

少年はまたもポケットから道具を取り出した。今度は何やら紐状の物であつた。

「ドクターさん、これを所長さんの体の手に握らせてください」

「ああ、わかつた、もう何が起こつても驚けそうにないぞ」

ドクターがロープの方端を所長の肉体の手に握らせ、少年はもう方端を一緒に帰ってきた所長らしき物の手にくくりつけた。すると途端に魂であった所長がロープを伝つて肉体に吸い込まれるように消えていった。

「やつた! うまくいったぞ!」

「ん……こは……?」

「所長! よかつた気が付いた!」

所長の肉体に確かに魂の灯が宿つた。

「ありがとう名も知れぬ英靈、所長はまだ意識がはつきりしてないみたいだから、代わりに僕がカルデアを代表してお礼を」「そんな照れるなあ」

「謙遜することはない、君が行つた行為は奇跡にも等しい。それと名前を教えて欲しい、いつまでも名の知れぬ英靈じやあ格好がつかないからね。見たところアメリカ西部開拓時代のガンマン風だから、もしかしたらかの有名なビリーザキッドかな?」

「いやあ、ビリーザキッドなんて言われるとますます照れちやうなあ。僕はノビータつてことになってるけど、本当は野比のび太つていうんだ」

「ノビータだつて！ 実在していたのか！ それにその本名からするともしかして東洋人かな？ これは歴史的大発見だぞ、かの伝説のガンマンが実在していて、しかもあの時代ではほぼ在り得ない東洋人だつたなんて！」

その存在は御伽噺とされていた。だが伝説が事実だつた。

「ノビータ！ やっぱりあなたがノビータなんだ！」

「マスターは僕の事を知つてるの？」

「もちろん！ 私のひいおばあちゃんからとおじいちゃんのお母さんから何度も話を聞いたもの！」

海を越えて、時代を超えて、過去の伝説が今再び蘇つた。少年は決して力強くない、頭だつてそれほどよくない、運動だつて苦手、それに臆病、だけど銃の腕前は宇宙一、そして他人を思いやれる優しさととびつきりの勇気を持っている。

これから彼らは、とても大変な困難に挑んでいくことになる。だけどきっと彼らが負けることはない。正しき優しさが、世界を救うことになるだろう。これはその道程のはんの始まりに過ぎない、ただのプロローグだ。

一章・一節

「フランス？」

「あ、僕知ってる。パンが無かつたからケーキを食べてた国だよね？」

「ああ、マリーなんとかねつと！」

「えつと、のび太さん、パンが無ければケーキを食べればいいとは言われてますが本当にそうしていたわけではありません。それに先輩、なんとかねつとではなくアントワネットです。さらに付け加えるなら彼女のその発言は現代では創作だったという説が大変有力な物になっています」

「へえー、さすがマシユ、物知り！」

なんとも頭の中が空っぽな二人の会話に、大きな盾を持つた少女、マシユ・キリエライトは少し呆れたように解説を行う。そんなマシユに呆れられる二人は、世界最後にして唯一のマスター藤丸立香と彼女のサーヴァント野比のび太である。そもそもなぜ二人がそんな会話をしているかと問われれば、それは彼女達が今まさにフランスの地に立っているからにほかならない。

レイシフト、人理継続機関カルデアで行われるタイムワープのような行為である。彼女達はレイシフトを用いて、人理焼却の原因、つまり世界が滅ぶ原因を修正するために過去の時代のフランスに飛んだのだった。

「ひとまず情報収集を行いと思います」

「賛成！」

「異議なし！」

「ちようどことにあちらの方に現地の方も見えています。ひとまず話しかけてみましよう」

「マシユはフランス語話せるの？」

「あ、いえ熱意があればきっとなんとかなるかと……」

「それなら、ほんやくこんにゃく！」

「のび太さん、それは？」

「こんなにやくだ！ マシユ斬鉄剣持つてない？」

「申し訳ありません先輩、ちょっと何言つてるかわかりません」

「マシユがつめたーい！」

「とりあえず先輩は置いておいて、のび太さんそれはいつたい？」

「ほんやくこんなにやくだよ。これを食べれば誰とだつて話せるんだ

！」

「なるほど、仕組みは分かりませんがとても便利な食べ物ということですね。いただきます」

「私も食べるー、いつただきまーす」

もきゅもきゅと二人はこんなにやくを食べはじめた。

「これは、初めて食べましたがなんというか不思議な食感です」

「おいしい！ これで私もマルチリンガル！ ハロー・ボンジュール
シェイシェイこんなにちわ！」

「先輩、最後のは先輩の母国語では？」

「そうだつた！ ところで国連つていろんな言語が話せないと働けないらしいけど、これなら私も働ける！」

「いえあの、カルデアは一応は国連の所属組織なので、ある意味では先輩は国連で働いているようなものなのではないでしょうか？」

「まじか！ 私すぐー！」

「ひとまず、これで会話には問題ないでしよう、ではマシユ・キリエライト行きます！」

「頑張れマシユ！」

そして果敢にも現地住民であろう兵士のような恰好をした人物にマシユは突撃していった。

「ぼんじゅーる、私たちは怪しいものではありません。少し聞きたいことがあるのですが……」

「怪しいやつ！ 敵襲だー！」

マシユはあえなく撃沈した。しかしそれも当然のことであった。

今のマシユの姿はデミサーヴァントとして大きな盾とやけに露出の高い鎧のような物であり、これで怪しくないなんてことは当然なかつた。

「すみません先輩！ 交渉は失敗に終わりました！」

「残念マシユ！ こうなつたら仕方がないから戦おう、みねうちで
！」

「みねうちつて何？」

「血が出ないように戦うこと！ ノビータはその拳銃でいつもシ
ミュレーション通りでお願い！」

「分かつた」

「はい、マシユ・キリエライト出ます！」

敵兵の数は六名に対して、こちらは戦闘員二名に非戦闘員一名の編成であつた。マスターである立香を守りながら戦うマシユとのび太が圧倒的に不利に思われたがそんなことはなかつた。

六回である。わずか六回鳴った音とともに敵は戦闘不能になつた。ポップコーンでも弾けたような軽い音になると同時に敵兵一人が倒れた。それを見た仲間が動搖しているとすぐ次の音がなつた、また一人倒れた。何が起こっているか理解出来ない残りの四人は思わず逃げ出した。しかしいつの間にか回り込んでいたマシユに気が付いて足を止めたその瞬間、次の音が二連続で鳴つた。そして二人が倒れた。それを見た残りの二人は恐怖に駆られた、なんとか活路を開こうとマシユに槍の矛先を向けた瞬間、最後の二回の音が鳴つた。立っているのはのび太とマシユと立香の三人だけだつた。

「どんなもんだい！」

敵を倒した音の正体はのび太が両手に持つ拳銃であつた。形状こそ西部劇でよく見るシングルアクションアーミーだつたが色合いはまるで玩具であつた。敵はこの拳銃にやられたのだった。戦闘が始まるとすぐ最初の一発が放たれた。いつ抜いたのか目を疑うほど早い撃ちであつた。次に素早く標準を変え一発目が、その次にさらに目にも止まらない早撃ちで二つの弾丸が放たれた。そして少し間を開けてゆつくりと標準が合わせられ、最後の一発が放たれたのだった。

「戦闘終了です、もつとも私はほとんど何もしていませんが」「私のアーチャーは最強なんだ！」

「いやあ、最強なんて照れちゃうなあ」

これがのび太の力だつた。のび太はグズでノロマでマヌケだつたが、これだけは、射撃の腕前だけは誰にも負けることは無かつた。

「でも皆寝ちゃつたから、次どうしよう?」

「あ、考えてなかつたや」

「まあなんとかなるよ、へいきへいき!」

倒れた兵士達には怪我一つ無かつた。皆すやすやと気持ちよさそうに眠つていいだけだつた。ドリーム銃、それがのび太の持つ道具の名前だ。これは弾丸が当たつた相手を眠りに誘う道具で、当たると丸一日夢を見ながら眠るだけの殺傷能力は全くない武器だつた。

「」の調子でどんどんいつてみよう!」

「おー!」

「」んな調子で本当に大丈夫でしようか……」

どこかノーワン気な立香とのび太、それに対してもシユだけがどこか心配しながら一行はフランスの地を進んでいった。その様子はさながらピクニックのようであつた。

一章・二節

「そんなのおかしいよ！」

のび太は声を荒げてそう叫んだ。間違つてることを間違つていると素直に指摘することは意外と難しい。大人になると特に飲み込まなければならぬ、我慢しなければならない理不尽というものは自然と増えていく。しかし、のび太はそれは違うとはつきりと口にする。それは彼が子供だからではない、彼が誰かのために怒ることの出来る優しい人間だからだ。

「よいのです。私は私の結末に対して誰かを恨むことは決してありません。私は私の信じるままに、主の声に導かれ道を進んだのです」「でもそんなの間違つてるよ！ ジャンヌちゃんはみんなのために戦つたのに！」

「あなたはとても心優しいのですね。ですがいいのです、全てはすでに起こつてしまつたこと、もし主が今からでも別の道を用意してくれたとしても、私は一切の迷いなく同じ道を進むでしよう」

話は平行線だつた。決してその行いが正しい物ではないと主張するのび太だつたが、相手は全てを受け入れていると言う。それも当然の事であつたかもしけない、のび太が話している相手はジャンヌ・ダルク、神の声に導かれるままに戦い、そして命を落とした聖女である。彼女の意見を曲げることはきつと一筋縄ではいかない。

「お一人ともその辺りにしましよう。のび太さんの言うようにジャンヌ・ダルクの最後は決して正しいものではなかつたかもせません、しかし残酷な話ですがそれはもう過去に終わつてしまつた事です。それよりも今現在の問題に目を向けましょう」

のび太達はフランスの地を回つてゐる最中にサーヴァントであるジャンヌに出会つていた。彼女が言うには今のフランスは竜を率いる魔女に蹂躪されているとの事だつた。

「ノビータの言うことは凄くよくわかるけど、マシユの言う通り、今は竜の魔女について考えよう」

「マスター、でも……」

「大丈夫、私だつて同じ気持ちなんだもの、だから全部終わつてから二人でお説教したあげよう。なんでもかんでも受け入れちゃだめだよつて」

「……分かつたよ」

「よし、それなら今は竜の魔女だよね。なんでもジャンヌが生き返つてフランスに復讐してやろうとしてるとかだつたかな?」

「はい、フランスの民達は皆そのように言つていました。しかしそれはおかしいのです。竜の魔女が本当に私であつたなら救国に身を捧げた私は決して復讐などと言つたことは考えない筈です」

「じゃあきつとジャンヌのフリした誰かがやつてるんだ。ゆるせん、とつちめてやる!」

「先輩の言う通りだとして、なぜ魔女はわざわざジャンヌ・ダルクのフリをする必要があるのでしようか?」

「分かんない! けどきつと悪いこと考へてるに違ひないよ!」

「いえ、まあ犯人が人理焼却に加担していると考へると確かに良い事をしてゐるわけではないでしようが……」

「よしじやあ決まり! とにかく竜の魔女に会つてみて一発とつちめた後になんてジャンヌのフリしてたのか聞いてみよう!」

「なんとなくツッコミどころが満載な気がしますが、概ねの進路としてはそれほど間違つていないのでしよう」

立香は魔女に一発当てる準備運動と言わんばかりに見様見真似でシャドーボクシングを始めた。彼女達の進路をまとめるに、右ストレートでぶつとばす真っ直ぐにいつてぶつとばすであつた。これは頭の悪いのび太にも一回で理解出来た。

「よし、暗くなつてきたし今日はそろそろ休もう!」

「しかし、折角方針が決まつたのにノンビリしていくいいのでしようか、こうしている間にも竜の魔女は……」

「ダメだよマシユ、休む時はしつかり休まないと。明日頑張るために今日はご飯を食べてちゃんと寝る、じゃないとどこかで倒れちゃうからね。というわけでレッツキヤンピングターム!」

「キャンプ! それなら、キャンピングカプセル!」

マスターが音頭を取ると、のび太はポケットから道具を取り出した。見た目は一本鋭い角の生えた小さなボールだつた。のび太はそれの角の部分を地面に突き刺した。傍から見るとこれからゴルフでも始めるのかといった風であつた。しかし、地面に刺さつたそれは少し間を空けて、一気に大きくなつた。角の部分は柱となつて辺りの木々と同じくらいの長さになり、その柱によつて大きく膨らんだボル部分が支えられていた。

「すごーい！ なにこれ！」

「えつと、これはキャンピングカプセルつていつてあの丸い部分が部屋になつてるんだ。柱のところがエレベーターになつているからそこから登つてみて」

「なるほど仕組みは分かりませんが超高性能テントということですね」

「凄いですね。未来にはこんな便利な物が発明されるのですか」

「皆の分もすぐに出すね」

のび太は同じ物を更に三つ取り出すと同じように地面に突き刺した。

「有難いのですが、サーヴァントとなつたこの身には睡眠は不要です。私は外で見張りをしていましょう」

「ダメだよジヤンヌ、寝なくていいだけで寝れないわけじゃないんでしょう？ だつたらしつかり寝ないと、あつたかい布団でぐつすり寝る、こんな楽しい事他にはあんまりないよ？」

「しかし、寝込みを襲撃されないとも限りません……」

「もー、ノビータなんかいい方法ない？」

「うーんつと、あ！ これを置いて置こう、気配アラームとおもちゃの兵隊！」

のび太はポケットから警備員のような形をした道具と、兵隊の姿をしたおもちゃの人形のような道具を取り出した。

「こつちが気配アラームで怪しい人が近くに来たら教えてくれるんだ。それでこつちがおもちゃの兵隊、命令しておけば怪しい人が来た時に戦つてくれるよ」

「グッド！ これでジャンヌもゆっくり寝れるね！ 安心したらお腹空いちやつた、マシュー、ハンバーグ食べたい」

「先輩には申し訳ありませんが、そういう手間の掛かる食糧の持ち合わせは残念ながらありません」

「ええー、僕もカレー食べたかったのに……、までよ、だつたらこれがあるじゃないか！ グルメテーブルかけ！」

のび太が次に取り出したのは何の変哲もないテーブルかけのような道具であった。お逃え向きのテーブルが無かつたのでのび太はそれを地面に敷いた。

「ちよつと小さいかな、だつたらビッグライト！」

のび太は今度は懐中電灯のような道具をポケットから取り出した。それは普通の懐中電灯のように光を発した。のび太がその光を地面に敷いたグルメテーブルかけに向けると、瞬く間にグルメテーブルかけが大きくなつた。

「これでよし！ さあみんな座つて座つて！」

「これはレジャーシートのような物でしょうか？」

のび太がレジャーシートのようにしたグルメテーブルかけの上に座ると、他の皆もそれに倣つて座つた。

「ふふふ、僕はカレーライス！」

全員が座つたのを確認したのび太がレストランで注文するかのように声を出すと、テーブルかけからまるで生えてきたかのように本当にカレーライスの乗つた皿が現れた。加えてそのカレーライスはまるで出来たてかのように湯気を上げていた。

「すごいすごい！ ジやあ私はハンバーグ！ あ、ご飯セツトで！」

マシューとジャンヌが在り得ない物を見る目で、カレーを見つめる横で順応力の高い立香はのび太に倣つて注文した。するとカレーライスと同じようにハンバーグの乗つた鉄板が現れた。鉄板は熱せられたばかりといわんばかりにハンバーグの肉汁を弾け飛ばしていだ。次に注文通りご飯が現れ、さらには味噌汁まで付いていた。当然どちらも出来たてのよう湯気が出ている。

「味噌汁もついてるなんて気が利く！ マシューとジャンヌは何にす

るの？」

「なるほど、仕組みは分かりませんが、頼めば好きな物が出てくると
いうことですか。では私は先輩の国の天ぷらという物を食べてみたい
です。あ、私もご飯セットでお願いします」

「ジャンヌは？」

「いえ、私には食事も不要ですので……」

「ダメだよ！ みんなと一緒に食べないとおいしくないよ！ ジャ
ンヌが食べないなら私だって食べないからね！」

「いえ私は……」

なおも断ろうとするジャンヌに立香は不満そうな顔で少しだけ涙
目になつた。それをみたジャンヌは諦めた。

「そうですね、では何かおすすめの物をお願いします」

二人の注文が終わるとマシユの前には注文通りの天ぷらの盛り合
わせとご飯に味噌汁、ジャンヌの前にはたっぷり具材の入つたシ
チューとパンのセットが現れた。

「よし、それじゃあみんなで、いつただきまーす！」

立香が音頭を取り、みんなが料理に手を伸ばした。

「ハンバーグ熱い！ おいしい！ 最高！」

「このカレーおいしいけど辛口だつた！ みずー！」

「なるほど、天ぷらとは揚げ物あるにも関わらず意外とあつさりと
しているのですね」

みんなが料理の感想を口にしている中、ジャンヌだけはゆっくりと
シチューを口に持つて行つた。

「おいしい……」

ジャンヌはその味に驚いた。生前はシンプルな料理ばかりであつ
たが故、沢山の具材の入つた複雑な味のシチューに感動すら覚えた。

ジャンヌはふと顔を上げた、立香は熱い熱いと言いながらも手が止
まることなく食事を勧めている、のび太は辛いと言ひながら慌てて水
を口に流し込んでいる、マシユは慌てずゆっくりと一つ一つの食材の
味を噛みしめながら食べている。みんなが異なつた食事風景だった
が一つだけ共通点があつた、それに気が付いたジャンヌは思わずつら

れてしまつた。

みんなが笑顔であつた。

「皆で食べると楽しいでしょジャンヌ！」

「ええ、とても！」

ジャンヌには不安なことが幾つもあつた。竜の魔女の正体やフランスの事、それらの事を考え焦る気持ちもあつたが、今は、今のこの楽しい時だけは誰にも気兼ねなく過ごしたいと、ジャンヌはそう思つた。

一章・三節

「藤丸立香パンチッ！」

「あなたマスターでしょ!?」

ジャンヌ・ダルク・オルタ、彼女は裏切られたフランスに対する復讐者であつた。自分こそがジャンヌ・ダルクの正しき姿であると彼女は主張する。そんな彼女は英靈として召喚された正規のジャンヌ・ダルクを罵つた。ジャンヌ本人はあまりにも自分とかけ離れたもう一人の自分の姿を受け止めきれずいた。そんな中でジャンヌ本人に代わつて怒りに燃えたのが立香だつた。

「詳しいことは知らない！ けどあなたは私を怒らせた！」

「だからってサーヴァント差し置いて自分から向かつてくるマスターなんてどこにいるのよ!?」

「ここにいるよ！」

英靈は人間とは隔絶した力を通常であれば有している。故にサーヴァントを召喚しての戦いであれば、マスターは後方で指示を出しか、なんらかの支援を行うのが普通のことであつた。ただ極々稀に立場が逆転する程の力を持つた者もいる。ただそれは本当に極一部のことであつて、至つて一般的な少女である立香には英靈と戦えるような力はない。

だからどうした、真っすぐ行つてぶつ飛ばす、そう言つたからにはやらないわけにはいかないのだと、立香は考えていた。

「マスター、強力ウルトラスープーデラックス錠のお試し版の効果は3分間しか持たないからそろそろ戻ってきて！」

「わかつた！ 最後に一発！」

握りしめた拳を下げ、一瞬だけ溜める。瞬きする間もなく放たれた立香の拳は残念ながらジャンヌ・オルタの持つ旗で受け止められてしまつた。今の立香には力はあれど技術は無かつた。単調に真っすぐ放たれた拳が防がれてしまうのは当然の事だつた。

「トゥツ！」

どこかのヒーローのように立香は地面蹴つて宙を舞い後ろへと下

がつた。そして丁度その時に道具の効果が切れ、立香は体から力が抜け出たように感じた。強力ウルトラスープーデラックス錠の効果は言つてみれば凄く強くなれる薬なのだが、のび太の持っていたのは試供品で三分間しか効果が持続しない物であった。その薬の効果が今切れたのだつた。

「あなた達見てないでなんとかしなさい！」

「そう言われてもどうにも体が動かないみたいでね、どうしようもないわ」

「ああもう使えないわね、こんなことならジルを連れてくるべきだつた！」

散々攻められ続けたジャンヌ・オルタは苛立ちを隠すことなく声を荒げた。彼女はこの場に複数の従者を率いていたが、何故か誰も彼ら全く体を動かすことが出来なかつた。相手ストップバー、それが動きを止めている道具の名前だつた。

「いいでしょ、ここは一旦引きます。ただ勘違いしないように、あなた達は私が必ず燃やし尽くしてあげる。特にそこの私の残骸の残り滓は入念に焼き焦がしてあげるわ」

そう言い放つてジャンヌ・オルタは引いていつた。動けない従者達は哀れにもそこらを飛んでいたワイバーンの口に咥えられてお持ち帰りされた。

「あらあら？　どうやら遅れてしまつたようだわ」

「それは良かつた、音楽家に荒事なんてさせないで欲しいものだからね」

魔女が去つてすぐにお姫様がやつてきた。

「ヴィヴ・ラ・フランス♪　とても素敵な戦いだつたわ！　あなた達名前を教えて下さる？」

キラキラ輝くお姫様、明るく陽気なお姫様、彼女は誰に憚ることなく場所に馴染む。

「わあ凄いよマシユ！　本物のお姫様だよ！　あ、私は藤丸立香です！」

「すごいかわいいお姫様だ！　僕は野比のび太です！」

「先輩！ もう少し緊張感を持つて下さい！ 彼女達が味方だと決
まつたわけではないんですよ!?」

「もー、マシュはお堅いなあ、こんな素敵なお姫様が悪い人な訳ない
じゃない！ そつちの変な恰好の自称音楽家はちょっと胡散臭い
けど！」

「そんなことをおっしゃらないで？ 確かにアマデウスの姿は少し
愉快だけれど、悪い人ではないのよ？」

突然現れたお姫様と自称音楽家を怪しむマシュの隣で、立香とお姫
様はすでに意気投合していた。

「先ほどの戦い少しだけ見ていたの！ とつても素敵だつたわ！」

「えへへ、そんな事言われると照れるなあ」

「あら、照れることないわ。本当にかつこよかつたもの！」

「やれやれ、見ての通りマリーはこんなんだから僕がいろいろ説明
させてもらつて？」

年頃の若い乙女の会話を具現化したような様子のお姫様と立香を
差し置いて、自称音楽家のほうが話始めた。

「まあ、気が付いているかもしけないけど僕たちはサーヴァントと
さ。最も主のいない野良サーヴァントだけどね？」

「野良サーヴァント……、つまりあなた方は先ほどのジャンヌ・オル
タに対抗するために召喚された存在、ということでしょうか？」

「うん、理解が早くて助かるよ。ただまあ僕みたいな芸術系サー
ヴァントが召喚されたところで何が出来るかっていうんだけどね。
おつとそういうえばこちらから促しただけで自分たちの自己紹介を忘
れいたね。僕はヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトしがない
音楽家さ、それであつちのお姫様はかの有名なマリー・アントワネット
トさ。それでそろそろ君の名前を聞いてもいいかい？」

「え、あ、はい私はマシュ・キリエライドです」

「うん、それでさつきから静かなそちらのサーヴァントは？」

「私はジャンヌ・ダルクです」

「まあ！ ジャンヌ・ダルクですって！ 私あなたのことが大好き
なの！」

「私も好き！」

ジャンヌが自己紹介したタイミングで年頃の若い乙女二人組が会話に乱入してきた。そのままキャピキャピだとかいう擬音が見える会話にジャンヌを巻き込んでいった

仲間を増やした彼女達はこれから更に歩みを進める。いまだ始まつたばかりの人理修復の旅はこれからどうなるか分からないが、今ただ言えることが確実に一つだけあった。彼女達は希望に満ち溢れているということだ。

一章・四節

「ロマン、彼をどう思う？」

「唐突になんだいレオナルド、彼っていうのはのび太のことであつてるかな？」

レオナルド、かの有名なモナリザの作者であり万能の天才と名高いレオナルド・ダヴィンチその人である。もつともその見た目はモナリザであつたが、彼、或いは彼女にとつて性別などというものは些細な問題でしかなかつた。

「そうだ、はつきり言つて私は彼が恐ろしい。いや正確にいえば彼自身ではなく彼の持つ道具がだけれどね」

「まあ、言いたいことは分からなくもないよ。彼の道具はどれもこれも魔法の域に達している、持つ者によつて恐ろしいことになりかねない事は僕だつて理解してゐるさ。でもそんな心配はいらないと僕は思うんだ」

「なぜだい？」

「決まつてゐる、彼がとつびきりの善なる者だからだよ。これといった根拠があるわけじやないけれど、彼は信頼に値する者だと思うんだ」

「確かにそれは私もなんとなく分かる。ただ私が最も恐れていることは道具が敵に奪われる事だ。彼の道具を調べてみたがあれは彼の宝具とは異なる物だつた、詳しい解析は済んでいないから原理は分からぬが、あれらの道具は少量の魔力を呼び水にしてどこからか取り出している物だ、道具自体は魔力は欠片も感じられなかつた」

「ということは道具は誰にでも使えてしまうということか」

「そうさ、使おうと思えば私だつて使える」

こんなふうにね、なんて彼、或いは彼女であるダヴィンチは頭の上に竹トンボのような道具を乗せて、道具のスイッチを押した。すると竹トンボは自動で回り始めた。その様子は小さなヘリコプターのようであつたが、事実その通りにダヴィンチの体は宙に浮き始めた。

「確かタケコプターと彼は言つていたかな？ こんな小さな機械で

私を浮かび上がらせる程の浮力を発生させているなんて到底信じられない、私がかつて考案したプロペラ機が確かに直径4、5メートル程だつたことを考へると、在り得ないとすら言える。彼はこれを科学による道具だと言つていたが、万能の天才たる私から言わせてもらえば、科学なめんなとしか言いようがないね」

少しの間、ダヴィンチは空中浮遊を楽しんでいたが、とても自由に飛び回れる程の広さがある訳でもないカルデアの管制室では長時間飛び続けた所で大した面白みもなく、ゆっくりと床に戻ってきた。

「と、まあ個人的には非常に興味をそそられる訳だが、今はそれどころではないからね。このタケコブター一つでさえ悪意を持った誰かの手に渡ればそれなりに悪用出来そうなものだ」

「なら、無事に彼らが特異点から帰還した時はその辺りの事を相談する必要があるわけだ」

「そういうことさ、出来ることなら早めに手は打つておいたほうがいい。ところで話は変わるが、君も確か何かの道具を彼から受け取つていたと思うんだけど、何を受け取つたんだい？」

「ああ、これさ」

そう言つてロマンは懐に大事に仕舞つてあつた本のような道具を取り出した。ロマンがページを開き数ページ捲るがそこには何も書かれていなかつた。

「白紙の本じやないか、彼はこれを何だと言つていたんだい？」

「魔法辞典、彼はそう呼んでいたよ。なんでもここに自分で好きな呪文と効果を書くと実際にその呪文が使えるようになるらしい」

「本当にそんな事が可能なら、それは万能の願望器どころの騒ぎじやないぞ、それこそ名前の通り魔法の領域だ」

「うん、まあそう思つてなんとなく恐ろしいから僕もこれを使う予定は今のところはないよ」

「賢明な判断だ、それにしてもやはり彼の道具は恐ろしいものだね」

「うん、あ、でもどれもこれもが危険な物ばかりじゃないみたいだよ」

「例えば？」

「夜間布団の中からおしつこできるホース」

「は？」

「だから、夜間布団の中からおしつこできるホースだつて」

「なんというか、病院とかであれば役に立ちそうだ」

「まあ、そんな道具もあるわけだからあまり彼の事を危険視するのはよしたほうがいいさ」

「確かにそうかもしない」

「あー、やめようやめよう、変に深刻に考えていると胃が痛くなつてくるよ。今はともかく彼らの存在証明に集中しよう」

ロマンはそう言い切つてコンソールに向き直る。そこから暫くの間、管制室での私語はなかつた。

これは特異点修復中のカルデア管制室の記録である。